

時代精神の表れとしてのコンダクト・ブックス*

吉 田 泰 彦

I have an eye to the spirit and manners of the age.

—Dr. John Gregory

はじめに

ここ数年かけて Jane Austen (1775-1817) に始まり, Ann Radcliffe (1764-1823), Frances Burney (1752-1840) の小説に取り組んできたが, これらの女性作家たちの作品は, それまで読んできたロマン派詩とほぼ時代を共有するにもかかわらず, 話題といい, 調子といい, あまりに大きな開きに戸惑うばかりであった。風俗, 文化, 流行, 日常生活といった人間社会の「散文的」局面で溢れかえる世界は, 二次資料としての研究書からの知識だけでは消化困難な乱雑さと同時に, 底知れない深みをもつように思われて, 歴史主義的なアプローチを可能にする文献素材の必要性を痛感するに至った。そして, ある程度まとまった分量を確保できる一次資料として, コンダクト・ブックスの存在が浮かび上がってきた。このような目的で利用する際のコンダクト・ブックスのメリットは, 第一に, 同時期の小説作品と類似の土壌から生れ出ていることにある。しかも, 小説のもつ芸術的制約がない分だけ直截的な言説が期待できよう。第二に, これらの小説が書かれ, また関与する時代は産業革命, フランス革命を挟む, イギリス社会が外形的には都市化, 商工業化, 内面的には, 宗教観, 道徳心, 価値観の変化等々, 大きく変貌を遂げた時代であり, 多くの人々が人生の指針をコンダクト・ブックスに求め, コンダクト・ブックスも時代の要求に応えるように, 個人的な書簡がカバーできる内容から徐々に守備範囲を広げて教育論, 社会改革論へと発展していった。

今回の論考においては, ほぼ 18 世紀内に公刊された著名な作品の中から, 以下のコンダクト・ブックスについて, 著者の伝記的素描に加え, 社会的・思

想的背景とあわせて内容の概略を紹介して、Austen 等の作品の解釈にどのように適用できるかその可能性を探ってみた。

1. Sir George Savile, 1st Marquis of Halifax. *The Lady's New-Year's-Gift: or Advice to a Daughter* (1688).
2. Philip Dormer Stanhope, 4th Earl of Chesterfield, *Letters to His Son* (written in 1740's and 50's and published in 1774).
3. Lady Pennington, *An Unfortunate Mother's Advice to Her Daughters* (1761).
4. Dr. Gregory, *Father's Legacy To His Daughters* (1774).
5. Dr. Fordyce, *Sermons to Young Women* (1765).
6. Hester Chapone, *Letters on the Improvement of the Mind* (1773).
7. Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman* (1792).

1. Sir George Savile, *The Lady's New-Year's-Gift: or Advice to a Daughter*

Sir George Savile, Marquis of Halifax (1635-95) は、彼の娘が 12 歳のときに、将来結婚して婚家に嫁ぐ時に備えて、*The Lady's New-Year's-Gift: or Advice to a Daughter* (『貴婦人への新年の贈り物、あるいは、娘への忠告』) (1688) と題した助言書を作成しました。Halifax 侯は王政復古期 (1660-85) から名譽革命 (1688) 時の立役者として著名な政治家で、Whig にも Tory にも属さず、しばしば立場を変えたため the Trimmer (日和見主義者) と呼ばれましたが、彼の基本的な性格は国家の利益の為に奉仕する現実主義者と評していいかと思います。Halifax の助言書が書かれた目的は上述のものであるため、政治家としての見地からというより、むしろ一父親の立場からの忠告といった性格が表面に出ています。その基盤となる幅広い世間知、鋭い人間観察には、やはり、激動期の政治家としての経験が働いているように感じられます。*Advice* は狭義の道徳書あるいは家父長制擁護の書と取るよりは、権謀術数の

時代にあつて、いかに誹謗中傷から自分の身を守り、不穏な世の中を安全に生き抜くかを教える為に記された、実用書とみたほうが妥当と思われます。この本は非常な人気を博し、Dr. Gregory の *Father's Legacy* と Mrs. Chapone の *Letters on the Improvement of the Mind* に取って代わられるまでの一世紀ほどの間、イギリス国内では約 25 版を重ね、フランス語、イタリア語に翻訳されました。

Advice の基調となっているのは娘への深い愛情ですが、盲目の愛に目が曇ることはなく、貴婦人が結婚後の人生において陥る可能性があるさまざまなトラブルに、前もって十分な知識を与えて、注意を促す姿勢に貫かれていますので、この本が長い年月若い女性読者の間で人気を保ったことも頷けます。時代の性格といえるかと思いますが、論理を用いて理性に訴える硬質な文体が特徴となっており、Pope 的な金言で説諭が締めくくられることもしばしばです—
“Vertue is the greatest Ornament, and good Sence the best Equipage”
(美德は最大の装飾、良識は最高の供回り)。

取り扱っている主題は「信仰」、「夫」、「行動」、「友人関係」、「虚栄心」、「高慢」、「気晴らし」等ですが、まずは、*Advice* を作成する根本的な動機である、女性にとって結婚とは親の愛情と助力を失う状況に身を置くことだという認識から生じる、娘の先行きに関するペシミズムに溢れた、感動的な一節を見てみたいと思います。*Advice* の中で、筆者の感情的な動きが感じ取れる唯一の箇所です。キー・フレーズにはイタリックを施しました。

I will conclude this Article with my Advice, That you would, as much as Nature will give you leave, endeavour to forget *the great Indulgence you have found at home*. After such a gentle Discipline as you have been under, every thing you dislike will seem the harsher to you. The tenderness we have had for you, My Dear, is of another nature, peculiar to kind Parents, and differing from that which you will meet with first in *any Family into which you shall be transplanted*; and yet they may be very kind too, and afford no justifiable reason to you to complain. You

must not be frightened with the first Appearances of a differing Scene; for when you are used to it, you may like the House you go to, better than that you left; (19)

一言でいえば、生まれ育った家庭での安楽な暮らししか知らない娘が、嫁いでは、慣れない環境で赤の他人の評価や敵意にさらされる恐れのあることに覚悟をもたせつつも、その懸念を楽観主義にくるんで打消そうとしています。ここでは、女性が結婚して別の家庭に入ることが“transplant”「移植・植え換え」と表現されていますが、人生における女性の従属的かつ受動的なあり方を表現して余りある言葉ではないでしょうか。この状況は離婚が許されず、家柄・一族の観念が強固であった当時の父権性社会、特に貴族・上流階級においては普遍的に確立した事態であって、Austenの*Northanger Abbey*, *Pride and Prejudice*, *Mansfield Park* や Burneyの*Cecilia*, *Camilla*, Radcliffeの*Udolpho*, *Italian*等の小説の前提条件となっています。EmmaにおいてKnightley氏がEmmaの家に入って妻の父と同居するという設定は、これを逆転させた、特別な例外です。あるいは*Persuasion*において海軍軍人の妻が長(なが)の留守を預かったり、あるいは、長期間に渡る船上共同生活を営むという形態は、伝統的な夫婦の暮らし方に対するアンチテーゼとして提示されているように感じられます。

「夫」の項では、嫁家では、当初は、外国におけるよそ者の地位を甘受して、夫の親や親族の意向に配慮して、すぎた振舞を控え、しきたりに合わせる(conform)ように努めること、特に相手のプライドに関わるような失敗を犯さないよう諭します。また、身の丈にふさわしい暮らしを勧め、欲望に判断力が狂わされることのないよう戒めます。

…there is no stronger Evidence of a Crazy Understanding, than the making too large a Catalogue of things necessary, when in truth there are so very few things that have a right to be placed in it. (26) (実際は必需品のリストに入れるべきはほんの僅かであるにもかかわらず、何でもかん

でも必需品のうちに数えるのは、判断力が狂っている何よりの証拠だ。)

「行動」の項は出費に関連した注意が語られます。たとえ慈善といった善行であっても各々の分に応じて、無理のない範囲にとどめることを強調します。筆者は、人々が「世間体」のために見栄を張ったり、「義務」という言葉で自分を欺きがちなことを知っています。

Generosity wrong placed becometh a *Vice*. It is no more a *Virtue* when it groweth into an Inconvenience, Vertues must be enlarged or restrained according to differing *Circumstances*. A Princely Mind will undo a private Family: Therefore things must be suited, or else they will not deserve to be Commended, let them in themselves be never so valuable: And the *Expectations of the World* are best answered when we acquit our selves in that manner which seemeth to be prescribed to our several Conditions, without usurping upon those *Duties*, which do not so particularly belong to us. (27)

Cecilia では、「世間の期待」にしたがって豪華な生活を続けて破産の憂き目を見る、愚かで見栄っ張りの Harrel 夫妻や、個人の資力を越えた「義務」を果たそうとして自己崩壊に到るヒロインの悲劇が語られます。

有閑階級において社交上の交際は避けて通ることができないほど一般的である一方、婚外における、あるいは結婚につながらない男女関係において、女性は極端に不利な扱いを被った時代ですから、これに関する注意は様々な言葉を尽くしてなされています。一例を見ておきましょう。

Therefore nothing is with more care to be avoided than such a kind of Civility as may be mistaken for Invitation; and it will not be enough for you to keep your self free from any criminal Engagements; for if you do that which either raiseth Hopes or createth Discourse, there is a Spot thrown upon your Good Name; and those kind of Stains are the harder to be taken out, being dropped upon you by the Man's Vanity, as well as by the Woman's Malice. (28)

同性の友人関係の場合も、世評が付いて回ることを忘れないよう警告されます。すなわち、すでに社会的・倫理的非難を浴びている人と交際を始めれば、“Chusing implieth Approving”（選択は是認）であり、似たような人生観の持ち主と見られるのは必至であること、あるいは、付き合いのある友人が不始末をしでかした場合にぐずぐず交際を続けると悪評が及んでくること等。*Camilla*においては、友人の警告にもかかわらず、活発なヒロインが一風変わったところのある年上の夫人と交際を初めて、さんざん振り回されたあげく、抜き差しならない窮地に陥る話が語られます。

貴婦人がおのれの身分より低い人々を軽蔑することを諫める、「高慢」についての助言で締めくくりたいと思います。人間のより本質的な値打ちは美質と徳にあることを理解しようとせず、肩書きや古い家柄に固執する愚劣さを辛辣に非難する様子は、*Pride and Prejudice*において、Bennet氏がCollins氏を嘲笑し、ElizabethがDarcy氏を面罵するのを思い起こさせます。

They would have the World think that no amends can ever be made for the want of a great Title, or an ancient Coat of Arms: They *imagine*, that with these advantages they stand upon the higher Ground, which maketh them look down upon Merit and Vertue, as things inferiour to them. This *mistake* is not only *senseless*, but *criminal* too, in putting a greater Price upon that which is *a piece of good luck*, than upon things which are valuable in themselves. (43)

子供との関係については、夫の場合と似て、愛情に満ちた暖かい家庭といった像からはかけ離れた見解を示しています。一言で言えば、親としての権威を保ちつつ子供の怒りを買わないように努め、親に従順であることが子供にとって得であることを教え込むという考え方です。「あなたはあなたの子供たちの中にいる時、敵の中にいるのと同じように、しっかり警戒を怠らないようにしなければならない」(You are to have as strict a Guard upon your self amongst your Children, as if you were amongst your Enemies. [23]) と

いう忠告からは、世間の厳しい人間関係が家庭の中にまで浸透している社会状況が反映されているようです。Burney や Radcliffe には、主に身分制度に抵触するような男女関係をめぐって親子間、家族内での、家庭の崩壊さえ辞さない類いの激しい争いが現出しますが、上記の Savile の陳述が過剰な防衛心ではなく、必要な用心に基づいていることを証明するように思われます。

2. Philip Dormer Stanhope, *Letters to His Son*

Philip Dormer Stanhope (1694-1773) は代々忠実な王党派の家に、第三代 Chesterfield 伯と Halifax 侯爵の娘との間に生まれて、成年の 21 歳に達する前に Whig 党所属の下院議員に選出されました。1726 年には父の死亡に伴い伯爵及び上院議員の地位を引き継ぎました。卓越した演説の才能を発揮して、George 一世 (1714-27)、George 二世 (1727-60) 時代に政治家として活躍した Chesterfield は、同じ Whig 党出身の超大物政治家 Sir Robert Walpole (首相 1715-17, 21-42) とはライバル関係にありました。1728-32 年には英国大使としてオランダ・ハーグに滞在し、その時未婚の子供をもうけています (1732)。帰国後 (1733) に George 一世の庶子である、当時 40 歳の Petronilla, Countess of Walsingham と結婚しましたが、純然たる財産目当ての政略結婚で、婚外交渉は続きました。1745 年アイルランド総督に任命されて、職務上の成功を収めていますが、健康問題のために短期間で辞任し、1746-48 年には国務大臣を務めました。

Chesterfield の子供といえば前述の婚外子 Philip Stanhope がいるのみですが、この子が 5 歳のときから、36 歳で亡くなる直前までに彼宛てに書かれた手紙が *Letters to His Son* というわけです。母親のもとで養育され、正規の大学教育は受けず、個人教授を経てグラント・ツアーによって仕上げられていますので、*Letters* は学校教育と家庭内父親業の代替措置を兼ねるように目論まれているといえます。自分と同じように、国会議員、外交官への道を歩むという目標を設定して、学業への督励に始まり、gentleman としての教養、身だし

なみ、マナーの習得等々にはじまり、外国社会、国際情勢の詳細な理解を説き勧め、完璧を要求する様からは、ひとりの人間を立派に仕立て上げて、社会の上層部で生き抜くために必要な資質を欠けることなく身につけさせようという現実主義的で真剣な姿勢が際立って感じ取れます。そしてこの真剣さは、叱咤激励を越えて、脅迫にまで及ぶことが一再ならずあります。たとえば、“be persuaded that I shall love you extremely while you deserve it; but not one moment longer.”（愛するに値する人間であるうちは大いに愛するが、そうでなくなった瞬間に愛を失うと心得よ。）

9歳の Philip に宛てた手紙を、イタリック部を中心に見てみましょう。ここには Chesterfield の教えのエッセンスがあり、そして、彼の言葉遣いが常に具体的かつ詳細、そして明瞭であることの一例でもあります。

I warned you, in my last, against those *disagreeable tricks and awkwardnesses* which many people contract when they are young, by the negligence of their parents, and cannot get quit of them when they are old; such as *odd motions, strange postures, and ungentee carriage*. But there is likewise an awkwardness of the mind, that ought to be, and with care may be, avoided: as, for instance, to mistake or forget names; to speak of Mr. What-d'ye-call-him, or Mrs. Thingum, or How-d'ye-call-her, is excessively awkward and ordinary. To call people by improper titles and appellations is so too; as my Lord, for Sir; and Sir, for my Lord.

(August 6, 1741)

Letters においては *awkwardness* を戒め、*good-breeding* を勧める趣旨の教えは数限りなく繰り返され、強調されるので、必ずしも人間の内面性を軽視しているわけではないのですが、後世の読者や批評家の一部に、人当たりのよさで世人を欺きつつ自己の利益を追求するエゴイストの勧めといった見方を生みました。

those lesser talents, of an engaging, insinuating manner, an easy

good-breeding, a genteel behaviour and address, are of infinitely more advantage than they are generally thought to be, especially here in England. Virtue and learning, like gold, have their intrinsic value; but if they are not polished, they certainly lose a great deal of their lustre: and even polished brass will pass upon more people than rough gold.

What a number of sins does the cheerful, easy good-breeding of the French frequently cover? Many of them want common sense, many more common learning; but, in general, they make up so much, by their manner, for those defects, that, frequently, they pass undiscovered. I have often said, and do think, that a Frenchman, who, with a fund of virtue, learning, and good sense, had the manners and good-breeding of his country, is the perfection of human nature.

(March 6, O.S. 1747)

上記文面から理解できるように、Chesterfield の立場は内面的な価値と外面的な価値の微妙なバランスにあるようにみえますが、信仰はおろかキリスト教的な精神、道徳に触れることが皆無という事実、女性関係に関する不道徳ともいえる記述、とりわけ著者自身の伝記的事実ともあいまって、文字通りには受け取ってもらえませんでした。Letters は公刊（1774）以来数十年好評を博した一方で、Dr. Johnson の有名な “teach the morals of a whore and the manners of a dancing-master”（売春婦の倫理とダンス教師のマナーを教える）という酷評は、18-19 世紀の Letters および著者人物評価の一つの典型を示しているといえます。John Bull 気質を大切にしている人々にとっては、“the English crust of awkward bashfulness, shyness, and toughness”（不器用に恥ずかしがったり、引っ込み思案であったり、頑固を通したがる、イギリス的な殻）を脱ぎ捨てて、フランス的な優雅さの衣を纏うことを説く Chesterfield の人生哲学は許し難い不誠実に聞こえたにちがいません。

かくして、Frank Churchill という人物をめぐる、ふたつの相異なる立場からの白熱した議論が Emma において提出されます。ここで注意すべきは、弁護する Emma もこきおろす Knightley 氏も、ともに Frank に一度も会っ

ていないという事実です。彼らの議論は Frank その人というより、Frank 的な人物—Frank は France 人のもじり、とはしばしば指摘されています—に関する議論であり、Austen の作品によくみられる価値観の争いを劇化したものとみなすことができます。

金持ちの叔母夫婦に育てられた Frank Churchill が父の再婚祝いのための訪問を何度も延期する理由を養父母に対する遠慮、しかるべき礼儀と擁護する Emma の意見に対して、Knightley 氏は正しい行動を貫けばいずれみんなに理解されるものと反論します。Emma はさらに、こどもの頃から両親を敬って育ててきた、愛想のいい青年 (amiable young man) には正面から逆らうことなど不可能だと主張しますが、この後、英語の amiable とフランス語の aimable の定義を軸とした、Knightley 氏による英仏気質論に発展します。

your amiable young man can be amiable only in French, not in English. He may be very 'aimable,' have very good manners, and be very agreeable; but he can have no English delicacy towards the feelings of other people: nothing really amiable about him. (141)

あなたのやさしい青年がやさしいというのは、フランス語の意味でにすぎないで、英語の意味でエイマブルではないのです。いたって『愛らしく』、いたって様子がよく、いたって愛想がいいかもしれないが、他人の感情にたいするイギリス的な心のこまかさはないのです。真にやさしいところなど、すこしもないのです。

とうとう Emma は「愛想のよい青年」に「あらゆる美德」(all the virtues) まで求めるには無理があると譲歩する一方で、いろんな人の趣味に合わせて話ができるという長所を挙げて弁護を続けますが、これに対する Knightley 氏の反論は痛烈です。そして、下記の陳述からは、Frank Churchill をめぐる議論が Chesterfield の *Letters* を念頭に置いたものであることが、かなり濃厚に確認されるかと思われます。

the practised politician, who is to read every body's character, and make

every body's talents conduce to the display of his own superiority; to be dispensing his flatteries around, that he may make all appear like fools compared with himself! (141-2)

海千山千の政治屋，あらゆる人の性格を読みとり，あらゆる人の才能を自分の優越性を見せびらかすために役立て，自分と比較すれば，だれもがばかに見えるように，あちこちにお世辞をばらまくとは！

最後に，上のような議論が発生したのは *Letters* が広く読まれ，また，それゆえに Chesterfield 的世間知が文脈を離れて一人歩きした，さらには，利用可能なひとつの概念（エートス）として誇張されることさえあったことの一つの証拠となるでしょうが，*Letters* それ自身は，あくまでも私的目的で，すなわち，職業人としての経験を，同じ道を進む準備として，不在の父が息子に伝えるという限定的な条件の中で，書かれたものだという事実を忘れてはならないでしょう。

3. Sarah Pennington, *An Unfortunate Mother's Advice to her Absent Daughters*

Lady Pennington こと Sarah Pennington (d. 1783) についての伝記的事実は，彼女の有名な *An Unfortunate Mother's Advice to her Absent Daughters* (1761) に記されていること以外にはほとんど知られていません。この著書の内容は二つの部分からなり，彼女自身の身の上—身に覚えのない中傷のために夫と別居させられ，子供たちとも別れて暮らし，手紙のやりとりさえも許されていない状況—と，その経験から得られた，女性の振舞いについての忠告となっています。Lady Pennington の所説の一部はエッセンスにおいて Halifax 卿や Dr. Gregory などのそれと大きな違いはないように感じられます。けれども，ただ単に経験に裏打ちされた生々しい感覚が鮮明というだけでなく，クリシェにとらわれない独創的な思索家としての資質を発揮していると思わせる陳述が随所に現れます。そして，後半部分においては，個人的な感

慨の域を遥かに越えて、社会改良家的陳述へと向かいます。おそらくは、12年後に出版されることになる Hester Chapone の著名な作品 *Letters on the Improvement of the Mind* (1773) に影響を及ぼしたとみることも可能かと思われまゝ。なお、John Pennington 准男爵との別居状態は夫人の死亡時まで変わらなかったようですが、ある記述によりますと、彼女は住んでいた広い村の困窮した人々に自身の限られた収入の中から施しをしていたとのことでした。

An Unfortunate Mother's Advice は娘への手紙を私信ではなく、出版物という形に頼らざるをえないことを語る文章で始まります。文面からは、家庭の事情を世間に公表する不都合を押してでも、娘たちが適齢期になる前に母親としての義務を果たさなければならないという切迫した気持ちが伝わってきます。彼女の現在の境遇に立ち至るそもそもの発端が、彼女自身の「大いに快活な性格と気分の高揚」(a great gaiety of temper, and from a very high flow of spirits [203]) に起因する、若い時分の人前での軽々しい振舞いにあることを認めます。そして、彼女が行動においても、心においても、道徳的過ちを犯していないことを、後に夫となる人は認めていたことを付け加えます。とはいえ、世評は外に見える部分からしか形成されません。

my private conduct was what the severest pride could not condemn; my public, such as the most finished coquette alone would have ventured upon: the latter could only be known to the world, and, consequently, from thence must their opinion be taken. (203)

また理由は不明ですが、結婚後も以前のような振舞いを続けるように命じたのは夫であったことが述べられます。結局のところ、世評を悪用して無実の罪を着せた動機は、彼女の父が独立資産（夫の自由にならないお金）という形で娘への相続を決めたことに夫が立腹したこと、すなわち、徳義上の理由ではなく、金銭上の遺恨であったことが明かされます。

この書簡は、Halifax 卿の *Advice to a Daughter* や Dr. Gregory の

*Father's Legacy*と同様、身近に暮して折々に適切な助言を与える機会を持ち得ない親の愛情の発露であることが述べられます。彼女の気がかりは「母親らしい不断のやさしい配慮が欠けていること」(the deprivation of a constant and tender maternal care [206])ですが、BurneyやRadcliffeの作品のほとんど、そしてAustenの一部の作品のヒロインは母親を亡くしている若い女性であり、彼女たちは「母親らしい配慮」が得られないためにそれぞれ孤独感を抱えていたり、余分な気苦労を背負い込んだり、片意地を張ったり、等身大以上の背伸びをしたりと、どこかしら無理をしている様子が感じられます。また、無頓着で無責任な母をもつ *Mansfield Park*のBertram 姉妹、*Pride and Prejudice*のBennet 姉妹の場合は、心理的にも、実際上も、時に母親不在と変わらない損害を被っていると、著者は判断しているふしが見受けられます。「母親らしい配慮」は時代の関心であったのでしょうか。

Penningtonは身分にふさわしい貴婦人を作るための「洗練された教育」は当然のこととして、「宗教的な教育」がより一層大切と主張します。目指すところは「その恩寵こそが人の永遠の幸福の源である、至高にして至上の存在の是認を獲得すること」(to secure to you the approbation of the greatest and best of Beings, on whose favour depends our everlasting happiness [208])と述べて、同時代の宗教家であるFordyceが美德(virtue)を強調するのは対照的な姿勢を示します。続いて、信仰の意義を説いて、

Let, therefore, your duty to God be ever the first and principal object of your care; as your Creator and Governor, he claims adoration and obedience; as your Father and Friend, he demand submissive duty and affection. Remember that, from this common Parent of the Universe, you received your life; that, to his general providence, you owe the continuance of it; and, to his bounty, you are indebted for all the health, ease, advantages, or enjoyments which help to make that life agreeable.
(208)

Pennington の強味が遺憾なく発揮された一節です。conduct books では滅多にお目にかかることのない、ピューリタンの信仰に立ち返ったような確信と信頼感は、おそらく、自身の寄る辺ない境遇を経て掴み取ったものでしょうが、教条主義とは似て非なるものであり、非常な説得力をもっています。

青年時代の過ごし方について、遊びに加えて、知識の習得、有益な習慣を挙げ、さらに、適切に選択された趣味・才芸を蓄えることが、年を経るごとに大きくなり、老齢に花開いて完成する平穏な幸福に通じる道 (214) と前置きしてから、「精神を向上させる」(improve your mind) ために、英語、フランス語、イタリア語の習得を、そして、歴史は自国の歴史をはじめに、続いてヨーロッパ諸国の歴史を学ぶことを勧めます。さらに、地理、算数を加えた後で、音楽、絵描きのような才芸 (accomplishments) は好みと才能があればよし、なければ、忍耐のみでは達成は不可能として手を出さないように注意します (216) が、例えば *Wanderer* には、見栄を張るだけのために、ちょっとした家庭の子女たちが無能を顧みず、競ってハーブを習いにいく様子が記されています。また、自然科学の勉強は、多種多様な自然の美を発見する楽しみを提供し、本来人間精神に植え付けられた知識欲を満足させて、自然の創造主へと思いを巡らせることに結びつくと述べます。大自然を構成する諸物を通して神の知恵と善意を感得し、賛嘆と感謝の念へと向かう (216-17) という考えは Thomson (1700-48) の *The Seasons* (1726-30) の基盤をなすキリスト教的自然観で、18 世紀前半に普及していました。

次に Pennington は、女性の学問についての世間の固定観念に反論しつつ、彼女の推奨する「精神の向上」(mental improvements) という考えそのものの是非について、「あなたの才能に耐えうる、そして、習得の機会に恵まれた、いかなる学問分野も怠ってはならない」(there is no branch of knowledge that your capacity is equal to, and which you have an opportunity of acquiring, that, I think, ought to be neglected. [217]) と主張し、啓蒙主義的な立場を明らかにします。女性の学問が家庭をおろそかにするという通念に関しては、そのような偏見を生み出すのに力を貸しているのは、学問を悪用

する女性であると手厳しく批判します。

such ill consequences proceed chiefly from too great an imbecility of mind to be capable of much enlargement, or from a mere affectation of knowledge, void of all reality. Vanity is never the result of understanding; (217)

ただし、家庭の運営は「女性の立派な仕事」(proper business of women) と言い、子供の教育の仕方、使用人の扱い方、つつましい費用で見栄えのする食事を支度することなど、家庭全体を賢明に、規則正しく、一定の規律に従って取り仕切るように説きます(218)。またこの見解と同根と思われるのが、小説とロマンス(空想冒険物語)については有害論の立場に立ち、「精神にロマンティックな傾向を与えがちで、判断に大きな狂いを生じさせて、振舞に致命的な誤りをもたらず」(they are apt to give a romantic turn to the mind, which is often productive of great errors in judgment, and of fatal mistakes in conduct; [225]) と Fordyce と変わらない意見を述べますが、*Camilla* や *Northanger Abbey*, *Sense and Sensibility* にも同様の見解が見られます。

結婚の話題に先立って、「よい気性(機嫌)」(good humour) と「よい性質」(good nature) を区別する必要を説き、前者は快活で感じのいい振舞、要するに人前での愛想の良さにすぎず、家庭に戻れば不機嫌な暴君にもなりうるもので、真に良い性質は後者にあることを述べます。

By good nature I mean that true benevolence which partakes the felicity of mankind, which promotes the satisfaction of every individual within the reach of its ability, which relieves the distressed, comforts the afflicted, diffuses blessings, and communicates happiness, as far as its sphere of action can extend; and which, in the private scenes of life, will shine conspicuous in the dutiful son, in the affectionate husband, the indulgent father, the faithful friend, and the compassionate master, both

to man and beast; (233-34)

続いて、夫を選ぶ際の三つの条件として、美德、よい性質、理解力 (virtue, good-nature, good sense) が揃っていることを挙げ、身分や財産は「分別のある友との付き合いから生まれる絶えることのない満足」(that constant satisfaction, which results from the social joy of conversing with a reasonable friend [242]) の代わりにはならないことを力説します。この一節からは財産目当てに結婚相手を選んだ Maria Bertram が愚鈍な Rushworth 氏に我慢できなくなったこと、あるいは、有力後援者をもつ牧師の地位を鼻にかけるしか能のない Collins 氏との結婚を決意する友人に落胆する Elizabeth Bennet が思い起こされます。ただ、Pennington 夫人が考える夫婦の結びつきが、現世的な意味合いのみならず、一種強烈な信仰心を感じさせる、プラトン風の超越主義的な色合いさえ帯びている点は、Austen の世界とは異質な特徴です。

Such a union, founded on reason and religion, cemented by mutual esteem and tenderness, is a kind of faint emblem, if the comparison may be allowed, of the promised reward of virtue in a future state; (248-49)

書簡の締めくくりとして、慈善の話題が取り上げられます。著者の関心が一個人のサバイバルに留まることなく、社会全体の幸福安寧にあることから、「精勤な貧乏人は共和国の有用な構成員であり、かれらにあなたの施しが授けられるのは結構なことだ」(The industrious poor are useful members of the commonwealth, and on them your benefactions may be serviceably bestowed; [250]) という主張は驚くべきことではありません。いうまでもなく、18世紀後半の貧富の差が大きいイギリス社会における人道主義的イデオロギーの高まりの中で、慈善行為は、キリスト教の教義の実践、富者の義務としての観念が定着していきましたが、キリスト教的啓蒙主義者である Pennington 夫人はこの潮流の、思想的な推進者のひとりであったといえるで

しょう。

Those who, by age or infirmity, are rendered utterly incapable of supporting themselves, have an undoubted right, not only to the necessaries, but even to some of the conveniences, of life, from all whom Providence has placed in the more happy state of affluence and independence. (251)

さらに、理屈倒れではなく、実際の局面においても目配りのきく実践者であることを要求する次の陳述からは、どちらのケースも、社会的、経済的地位の低さが原因となって、*Wanderer*の *Ellis* が周囲の人々にしばしば「傲慢な態度」で接せられたこと、あるいは、*Mrs. Bates* が *Emma* から「気まぐれな気分の不当な行使」を受けたことが思い起こされます。

All with whom you have an intercourse, even down to the meanest station, have a *right to civility and good humour* from you. A superiority of rank or fortune is no license for a proud supercilious behaviour; the disadvantages of a dependant state are alone sufficient to labour under; it is both unjust and cruel to increase them, either by a haughty deportment, or by the *unwarrantable exercise of a capricious temper*. (256)

4. Dr. John Gregory, *Father's Legacy To His Daughters*

Dr. Gregory (1724-73) の *Father's Legacy To His Daughters* (1774) は著者が死亡した翌年に遺族によって出版されました。Edinburgh の名家で、学者を多数輩出した一族の出身である John Gregory は医師であり、Aberdeen 大学、Edinburgh 大学で教授を務めました。*Legacy* は妻に先立たれていた著者が死を覚悟した病床にあって、若い娘たちに人生訓を遺す意図で書かれ、主題やトーン、姿勢において Halifax の *Advice to a Daughter* に、その *sarcastic* な調子は別として、大差は見当たりません。ただし、文体は職

業や taste を反映してか、時代がかった格式張ったところがなく、平易で近づきやすいものとなっています。

執筆の理由は、世間知らずの娘たちを利己主義的な世の中に遺していく心配のためであることが、冒頭で述べられます。

I know mankind too well: I know *their falsehood, their dissipation, their coldness to all the duties of friendship and humanity. I know the little attention paid to helpless infancy. You will meet with few friends disinterested enough to do you good offices, when you are incapable of making them any return, by contributing to their interest or their pleasure, or even to the gratification of their vanity.* (10)

また、自分が男尊女卑主義者ではないとわざわざ断りを入れていることは注目に値します。このようなコメントは、おそらく、当時の風潮と関連しているらしいことが窺えます。

I have considered your sex; not as domestic drudges, or the slaves of our pleasures, but as *our companions and equals*; as designed to soften our hearts and polish our manners; (12)

とはいえ、「われわれ[男性]の心を和らげ、われわれのマナーを磨くことを使命とする」女性という見方は現代のフェミニズムのイデオロギーには遠く及ばないことは明らかです。Legacyの背後に控える根本原理は、社会における男性と女性の役割、行動様式は異なるものだという揺らぐことのない認識であり (a certain *propriety* of conduct peculiar to your sex 「あなたたちの性に特有の、一定のふさわしさをもった振舞」)、Legacyは著者の現実主義的な世間知の開陳の所産といえます。以下はDr. Gregoryの現状肯定主義とも評すべき認識が相当に頑強であることを示す一節です。

The natural hardness of our hearts, and strength of our passions, inflamed by the uncontroled licence we are too often indulged with in

our youth, are apt to render our manners more *dissolute*, and make us less susceptible of finer feelings of the heart. Your superior delicacy, your modesty, and the usual severity of your education, preserve you, in a great measure, from any temptation to those vices to which we are most subjected. (12-13)

男性を貶めて女性を持ち上げる調子の一文ですが、“Propriety/ proper” や “modesty/ modest”, “delicacy/ delicate” は *Legacy* に頻出するキー概念であり、単なる個人の傾向というより、時代のエートスの反映であり、また、この本が読まれることによってそれを強化するという循環的な機能を果たすであろうことは推測に難くありません。

宗教に関しては、女性は「理解できないものについて頭を悩ます」(perplex yourselves about such as you do not understand) べきではなく、聖書以上の書物を読まないように勧められます。そして、おそらくは、*Wanderer* において神の存在についての疑念に衝き動かされて万卷の宗教書に取り組もうと考える Elinor Joddrell (Wollstonecraft がモデルとされています) が社会的にみて空想的人物ではなかったことが次の一節から窺えます。

...do not meddle with controversy. If you get into that, you plunge into a chaos, from which you will never be able to extricate yourselves. It spoils the temper, and, I suspect, has no good effect on the heart. (14)

ある意味でこれとは逆の動き、すなわち、宗教に対する無関心や小馬鹿にする風潮もみられたことも理解できます。

I have an eye to the spirit and manners of the age. There is a levity and dissipation in the present manners, a coldness and listlessness in whatever relates to religion which cannot fail to infect you, unless you purposely cultivate in your minds a contrary bias, and make the devotional taste habitual. (15)

「女性的特性の主要な美質のひとつは慎ましい控えめ」(One of the chief beauties in a female character is...modest reserve) と説き、「顔を赤らめないようになった娘は、最強の美の魅力を失ったことになる」(When a girl ceases to blush, she has lost the most powerful charm of beauty) とまで主張します。この時代の小説には若い女性が顔を赤くする場面はよくみられますが、「女性的慎ましい控えめ」の印であり、と同時に、このような仕草が廃れつつあることも読み取れます。また、男性に対して教養や知性のあることをひけらかすことに警告を発したり、あるいは、男性との交際については、Halifax と同じく、たとえ一線を越えない範囲であっても、したい放題することは不謹慎であり、危険でもあると戒めています。

読書について述べている箇所興味深い記述に出会います。「全巻の自然があなたの視界に広がっており、そして無限に変化する楽しみを提供する」(The whole volume of Nature lies open to your eye, and furnishes an infinite variety of entertainment) と James Thomson (1700-48; *The Seasons* [1726-30]) 的な見解を披露した後で、自然による人間の心の教育というロマン主義的なアイディアが顔を出します。

If I was sure that Nature had given you such strong principles of taste and sentiment as would remain with you, and influence your future conduct, with the utmost pleasure would I endeavour to direct your reading in such a way as might form that taste to the utmost perfection of truth and elegance. (27)

そして人間の知恵を働かせて人工的な taste を作り上げても、いずれ浮世の都合のために捨て去ることになり兼ねず、「自然があなたをどのように作ったかを知り、その計画を完成する」(to know what Nature has made you and to perfect her plan) こそが Gregory にとって理想的な教育であることが明かされます。

また、同じく娯楽の項において「不治の破滅的悪徳」と呼ばれ、「身勝手に

荒れ狂う感情」に行き着くと非難される博打 (game) は, Mr. Harrel (*Cecilia*), Mrs. Berlington (*Camilla*), Valancour (*Udolpho*), Mr. Wickham (*Pride and Prejudice*) たちが陥ったもので, 社会に蔓延した恐ろしい病であったことが見て取れます。と同時に, 知人・友人を招いて開かれた晩餐会で, 食事の後で男性・年配の女性を中心として行われるささやかな家庭的娯楽でもあったことは *Pride and Prejudice* などの記述からわかります。上記のケースではいづれも結婚に関連した文脈で彼らの習慣的賭博行為が言及されますので, 博打は結婚生活, 人間関係の破壊者として文学的に強力な喚起力を担いうる便利なツールであったといえます。

友情については, 忠告や尽力といった実際上の助けとは別に, “the immediate gratification which friendship affords to a warm, open, and ingenuous heart, is of itself a sufficient motive to court it.” (30) (暖かく, 開いた, 隠し立てをしない心に友情が与える直接的な満足感はそのだけで友情を求める充分な動機となる) というように, 心を開いた友達付き合いの精神的価値を認めます。他方, 恋愛については, 女性は男性が自分を愛していることを知って後, 好意を持つようにしなくてはならない, なぜなら, 女性は男性と違って思うように気持を明らかにすることはしてはならない慣わしになっているから, と忠告します。たとえば, *Camilla* の父もまた女性の嗜みとして同様の忠告を与えますが, これが元で, 様々なトラブルが起きて, 徐々に悲劇的な状況へと発展していきます。おそらく, この時代が “modesty” 「慎ましさ」, “reserve” 「控えめ」といった振舞を女性的美德として称揚する一方で, 心情を隠すことの負の面に目を向け始めたということではないでしょうか。

最後に, この当時宗教が一般的に世間でどのようにとらえられていたかを, 次の結婚に関する一節から垣間見たいと思います。

If you have a sense of religion yourselves, do not think of husbands who have none. If they have tolerable understandings, they will be glad that you have religion, for their own sakes, and for the sake of their families; but it will sink you in their esteem. If they are weak men, they will be

continually teasing and shocking you about your principles.—If you have children, you will suffer the most bitter distress, in seeing all your endeavours to form their minds to virtue and piety, all your endeavours to secure their present and eternal happiness, frustrated and turned into ridicule. (50-51)

著者の結論はきっぱりしていて、信仰心のない男を結婚相手として考えるなどいうことに尽きますが、信仰心のない夫が信仰心のある妻をどのように見るか、扱うかが窺い知れて興味深い。「信仰心をもっていることで、夫が妻を低く評価する」あるいは「あなたの原理原則的なやり方のために、明けても暮れても夫からからかわれたり、気落ちさせられたりする」という一文からは、無信仰者の立場からは、キリスト教信仰が理性や知性にもとる時代錯誤的迷信といった見方をされていたことが、他方で、「精神を美德と敬虔へ向けて形成する」あるいは「今生と永遠の幸福を確実にする」からは、信仰者にとってその根本的価値と効用が変わらず生きていることが、理解されます。

5. James Fordyce, *Sermons to Young Women*

James Fordyce (1720-1796) は Aberdeen に生まれ、1743 年に Aberdeen 長老会派 (presbytery) において説教師の資格を取得しました。1750 年代には説教集を公刊し、Scotland における傑出した説教師としての盛名を馳せて、1760 年に Glasgow 大学より神学博士を得ています。London において実業家として成功している兄弟の誘いもあって、都会での立身出世を求めて長老会派教会の牧師の地位を獲得します。Fordyce はまたたくまに London でもっとも著名で人気のある説教師のひとりとなって、有名人が彼の説教を聞きに集まるようになります。長身で表情豊かな顔つき、堂々とした物腰、そして雄弁をもって聞こえた Fordyce ですが、宗教的には種々の新教分派がはびこる中で特定の会派に偏ることなく、道徳心を表に打ち出して資産家クラスの若者に訴える説教スタイルが彼の持ち味でした。

Sermons to Young Women は 1765 年に出版され、主要な特質は書名からわかるように、身内の若者宛の個人的書簡ではなく、未婚の若い女性一般向けの説教集だということです。著者が目当てとする読者層はそれなりの資産のある中・上流階級に育つ未婚女性、いいかえると、社交界に關係する類いの娘さんたちであることははっきりとわかります。Fordyce が教会で日頃彼の聴衆に向けて行っていた説教を敷衍する形で書かれたにちがいないことは、その演説調の文体、信仰心よりも道徳心に訴える内容、読者をもちあげつつも注意を促す独特の話術から容易に推測することができます。というより、彼の卓越した説教を書物にという社会的要請が、聴衆、市民、出版業界その他から出てきたとみるほうが、おそらく正しいでしょう。人気のある書物で、1790 年から 1810 年の間に頻繁に版を重ねました。

Sermons の内容に関しては、「女性の美德」を種々の角度から検討するにとどまり、例えば、個人として、また、社会人としての人間的成長に関心を傾ける Chapone の *Letters on the Improvement of the Mind* (1773) と比べると、かなり保守的な立場から書かれています。大約、「正しい女性」とはどのようなものか、言い換えると女性の冒す「失敗」とはどのようなものか、そして、社会はそれに対してどのような制裁を加えるか、に尽きるかと思われまゝ。*Sermons* のテキストは散漫で繰り返しが多いため、今回はそのエッセンスを *Pride and Prejudice* (1813) からの引用を用いてご紹介します。下線部の陳述を総合すれば、*Sermons* における著者の主張の概観が、元の用語をほぼ網羅した形で、得られるでしょう。

She represented to him all the *improprieties of Lydia's general behaviour, the little advantage she could derive from the friendship of such a woman as Mrs. Forster, and the probability of her being yet more imprudent with such a companion at Brighton, where the temptations must be greater than at home.* He heard her attentively, and then said,

.....
 "If you were aware," said Elizabeth, "of the *very great disadvantage to*

us all, which must arise from the public notice of Lydia's unguarded and imprudent manner;

.....

Our importance, our respectability in the world, must be affected by the wild volatility, the assurance and disdain of all restraint which mark Lydia's character. Excuse me — for I must speak plainly. If you, my dear father, will not take the trouble of checking her exuberant spirits, and of teaching her that her present pursuits are not to be the business of her life, she will soon be beyond the reach of amendment. Her character will be fixed, and she will, at sixteen, be the most determined flirt that ever made herself and her family ridiculous. A flirt too, in the worst and meanest degree of flirtation; without any attraction beyond youth and a tolerable person; and from the ignorance and emptiness of her mind, wholly unable to ward off any portion of that universal contempt which her rage for admiration will excite. In this danger Kitty is also comprehended. She will follow wherever Lydia leads. Vain, ignorant, idle, and absolutely uncontroled! Oh! my dear father, can you suppose it possible that they will not be censured and despised wherever they are known, and that their sisters will not be often involved in the disgrace?" (222-23)

彼女はリディアがふだんから行儀のわるいことや、フォースター夫人のような女とつきあってもなんの利益もないことや、家にいるよりはずっと誘惑の多いブライトンで、こんな連れといっしょにいたらどんな軽はずみなことをしないものでもないということなどを、父に申したてた。父は注意ぶかく彼女の話を知っていたが、やがてこう言った—

(中略)

「もし、お父さまが、」エリザベスが言った、「リディアのうっかりした軽はずみな態度を世間の人が見たために、わたしたちがずいぶん損なめにあうだろう

(中略)

わたしたちが世間から重く見られ尊敬されているのが、リディアの性格の特徴となっている粗野な軽薄とあつかましさと野放図さのために、影響されないではすまない、と言うのです。ごめんなさい、わたしははっきりと申し上げねばならないんですから。お父さま、もしあなたがリディアのあふれ出る元気をおさえて、今のように男のあとを追いまわすことはあの人の一生の仕事ではないと

いうことを、お教えにならないと、リディアはすぐに手におえなくなりますよ。性格がそのまま固まって、十六で、自分も家族も世間のもの笑いになるような、手のつけようのない浮気娘になってしまいますわ。いちばんたちの悪い下品な浮気娘になってしまいますわ。若くてちょっと顔立がいいというほかはなんの取り柄もない、心が無知でからっぽで、ちやほやされたいばかりに、世間の嘲りを招いてもちっとも防ぐことのできないような。キッティだって、そういう危険がありますわ。リディアの行くところなら、どこへでもついて行くんですもの。見え坊で、無知で、怠けもので、我儘のしほうだいなんですもの！ああ、お父さまは、あの二人はどこへ出しても、非難されたり軽蔑されたりするようなことはない、わたしたち姉がしばしば不名誉の仲間入りをさせられるようなことはない、とお思いになりますの？

次女の Elizabeth が妹 Lydia のことでもう少し手綱を引き締めるように、父に申し入れる場面です。Lydia は「わたしたち姉」(Jane と Elizabeth) どちらとも対極的なキャラクターを与えられていて、いわば、世間的な不都合などどこ吹く風といったじゃじゃ馬娘であり、Fordyce が弾劾する、まさにその人格を具現化した造型とっていいでしょう。したがって、Fordyce が警告するような、女たらしのでたらめ男 Wickham にひっかかる、というより、選びとって後、彼の正体を知っても、恥じず、後悔せず、であることも、彼女の人柄にふさわしい成り行きといえます。このような妹の行状が他の姉妹の評判まで左右することを懸念するという状況を考慮すれば、半世紀を経て今なお Bennet 家の姉妹たちはきわめて Fordyce 的な世界に住んでいることになりました。

さて次に、*Pride and Prejudice* に登場する青年牧師 Collins 氏と Bennet 家の人々とのやり取りをみてみましょう。それなりの資産のある中・上流の未婚女性に向けて書かれた *Sermons* が、職をもたずとも生活が成り立っている紳士階級に属するベネット家のような家庭の書棚に蔵書として一冊所有されていることは、おそらく当時としては極々ありきたりの事態であったでしょう。適齢期の未婚娘ばかりを 5 人抱える Bennet 一家にとって一見もってこいとも

いえるこの書物はこの家では普段広げられることはなさそうです。 *Pride and Prejudice* の出版された時には初版から丁度半世紀経っていることになり、巡回図書館から借りた小説と比較されていることから推測できるように、彼女たちは時代遅れの堅苦しい本とみなしているにちがいありません。

Mr. Collins readily assented, and a book was produced; but on beholding it, (for every thing announced it to be from a circulating library,) he started back, and begging pardon, protested that he never read novels. — Kitty stared at him, and Lydia exclaimed. — Other books were produced, and after some deliberation he chose *Fordyce's Sermons*. Lydia gaped as he opened the volume, and before he had, with very monotonous solemnity, read three pages, she interrupted him with,

"Do you know, mama, that my uncle Philips talks of turning away Richard, and if he does, Colonel Forster will hire him. My aunt told me so herself on Saturday. I shall walk to Meryton tomorrow to hear more about it, and to ask when Mr. Denny comes back from town."

Lydia was bid by her two eldest sisters to hold her tongue; but Mr. Collins, much offended, laid aside his book, and said,

"I have often observed how little young ladies are interested by books of a serious stamp, though written solely for their benefit. It amazes me, I confess; — for certainly, there can be nothing so advantageous to them as instruction...." (67)

コリンズ氏はすぐに承知し、本がもちだされた。けれども彼はそれを見ると、(どこから見ても、巡回図書館からの借りものであることがはっきりしているの、)急にしりごみして、失礼ですが、自分は小説を読ませんと言った。キッティは眼をまるくして彼を見、リディアは大声をたてた。またほかの本がもちだされた。彼はすこし考えたあとで、フォーダイスの「説教集」をえらんだ。リディアは、彼がその本を開くと、あくびをしたが、彼がひどく単調にもったいぶってまだ三頁も読まないうちに、こう言って邪魔をした—

「お母さま....」

リディアは二人の姉に、黙っていなさい、と言われた。しかしコリンズ氏は、すっかり感情を概して、こう言った—

「僕は若い婦人たちが、御自分たちのために書かれたものでも、真面目なたち

の本となると、あまり興味をもたれないことを、しばしば見うけました。正直なところ、僕はおどろいているのです。なんと言っても、教えられるということほど若い御婦人たちのためになることはないんですからね...」

至る所で大仰なレトリックを用いて、万事、特に結婚問題に関しては、親の意向に従うべきことを説き薦めるこの本は、自己の感情と判断に基づいて行動することを当然のこととする Bennet 家の娘たちには縁がありません。Fordyce 博士とは同業者でもあり、所帯を持つにふさわしい職と地位を獲得したからにはそれ相応の妻は容易にみつかることができると考えている、愚鈍で傲慢な旧式人間である Collins 氏にこそ似つかわしいと作者が考えているようです。

さて、当代小説の恋愛の扱い方と女性読者への影響について、文体に注意しつつ、Fordyce 博士自身の見解を *Sermons* からみてみましょう。

...is it not manifest...that such books lead to a false taste of life and happiness? that they represent vices as frailties, and frailties as virtues? that they engender notions of love unspeakably perverting and inflammatory? that they overlook, in a great measure, the finest part of the passion, which one would suspect the authors had never experienced? that they turn it most commonly into an affair of wicked or frivolous gallantry? that, on many occasions, they take off from the worst crimes committed in the prosecution of it, the horror which ought ever to follow them? on some occasions actually reward those very crimes, and almost on all leave the female reader with this persuasion at best, that it is their business to get husbands at any rate and by whatever means?
(126-27)

当代風の恋愛模様の描写を「言い表わせないほどいかがわしく、煽情的」と呼び、結婚に至る過程とその後の苦勞を「最悪の恥ずべき手筈」を用いて成し遂げる「邪で浮ついた色事」の「なれの果ては曲事にほかならぬ」と、自らを高

みに置いた立場から、あらゆる言葉を尽くして罵倒しています。このように、一方をいったん非難すると決めたら口を極めてこき下ろすことによって、他方を夢のように魅力的なものに見せかける手法は *Sermons* の文体の特徴となっています。

とはいうものの、公平を期す為に、Fordyce 博士が女性の社会的使命に深い理解と関心をもっていたことを最後に付け加えておきたいと思います。多くの女性が結婚して家庭を活動範囲とするようになった時、職業を通じて社会と広く関わりをもつ男性の境涯と比較して女性の役割が劣らず重要なものであることを詳しく説き、立派に子育てする「女性を貶めたり、男性のほうが優秀であるような主張をしたり、女性が人生においてより重要な位置を占めることは不可能」(40) とする、男尊女卑の見方を否定します。女性がこどもの教育（広い意味での人間教育をさす）を通じて次世代、さらに次の世代と社会の根幹の形成に参画しているという視点からすると、男性よりも重要な役割を果たすと考える Fordyce 博士は、この点においては、女性解放論者の Wollstonecraft に近づくといつていいと思われます。たいていの場合相当な保守主義者に聞こえる Fordyce が以下のような主張を引用するのは興味深く感じられます。

"All mankind is the pupil and disciple of female institution; the daughters, till they write women, and the sons till the first seven years be past; the time when the mind is most ductile, and prepared to receive impression, being wholly in the care and conduct of the mother." (40-41)
 「すべての人は女性による教育を受ける学童であり、弟子である一娘たちは女性を名乗るまで、息子たちは生後七年が過ぎるまで—これは全面的に母親の養育と監督下であって、精神がもっとも柔軟で、訓育の影響を被りやすい時期である。」

6. Hester Chapone, *Letters on the Improvement of the Mind*

分量上の理由から、Hester Chapone に関しては伝記的な記述は省略して、また、*Letters on the Improvement of the Mind* (1773) についても、全 10

章のうち前半のみを扱うことにいたします。

the Improvement が 19 世紀中頃まで読み継がれていった理由として、文明社会を作り上げるためのリスペクタブルな教養人を養成することを目的とした、権威主義的雰囲気のない、懇切丁寧な教育書としての特質を挙げることができるでしょう。また、権威主義を免れたのは、女性から女性へ、しかも直接的な教育指導責任のない姪宛てに作成された文書であることが一因とみられます。とはいえ、Chapone の精神の改良への激しい意欲は、彼女の宗教原理主義とも相俟って、しばしば非常な押しの強さとなって現れることも否定できません。

the Improvement は、前述の通り姪宛ての書簡集ですが、Mrs. Montagu に出版を勧められた時にはすでに 5 年間に渡って書き送られていたものであり、私信として始まって、おそらくは公刊は意図していなかったことと思われます。ただ、その内容と調子からして、Dr. Gregory や Mrs. Pennington よりもパーソナルな響きが低く、一般読者向けとしても無理がないことは間違いなく、彼女の資質が「知的道德家」、「理性的道德家」と呼ばれるにふさわしいものであることの証明となるでしょう。さらに、*the Improvement* のおそらく最も顕著な特徴といえる、conduct book の思想として目新しいイデオロギーとみなすべきは、従来の「危険に満ちた世間」という観念から「改善の余地のある共同体としての社会」という観念への変化でしょう。そして、Chapone の基本的なスタンスである、社会への信頼感に基づく改良のための参画意欲とみなすべき感覚は、ここに由来するにちがいません。Burney や Radcliffe にとって世の中は敵意に満ちた荒野であり、しばしば家庭の中にまで外的世界の対立や反目が忍び込んでくる環境ですが、Austen の世界は種々の冷淡、不和、トラブルにもかかわらず、中核において、基本的に文明化した、礼儀正しく、穏やかな社会が息づいているようにみえます。

「15 歳になり、まもなく自分の判断で行動しなければならなくなる。だから、今こそあなたの振舞を導き、あなたの品性を確立するための根本方針を心に蓄える時です」(You are now in your fifteenth year, and must soon

act for yourself; therefore it is high time to store your mind with those principles, which must direct your conduct and fix your character. [52])
 と言って、人生の普遍的目標である「美德と幸福」は「熱烈に」希求しなければ達成することができない困難なものであるという前提から話を始め、神と人の両方から気に入られるように努力するよう説きます。Chapone にとっては「人間の美德の唯一確かな基礎は宗教」(The only sure foundation of human virtue is Religion [54]) であり、と同時に、世間からのよい評価あるいはよい人間関係を離れて幸福はありえないからです。そして、Pennington と同様、彼女にとって幸福とは今世だけのものではなく、神の国における永遠の幸福をも意味することはいうまでもありません。また、世間からのよい評価あるいはよい人間関係と言っても、「善意と正義の法則」から逸脱して他人に迎合することではなく、「有益で立派な社会の一員」となることによって生じる結果であることが次の一節からわかります。

You must *form* and *govern* your *temper* and *manners*, according to the laws of benevolence and justice; and qualify yourself, by all means in your power, for an *useful* and *agreeable* member of society. (54)

親孝行のアナロジーを用いて神への従順を説く「地上の父への義務が要求する以下のことをあなたは天なる父に対してなすことができようか」(Can you do less to your heavenly Father than what your duty to an earthly one requires? [56]) という意見からは保守的な説教師の声を聞くことができますが、彼女の場合、Samuel Richardson や Dr. Johnson など文壇における男性指導者たちから得られた引き立て、そして特に父親、男兄弟との長期間に渡る良好な関係を抜きにしては考えられないでしょう。また、最終的には宗教による助けの必要性を説きながらも、「道徳の偉大な法則はわたしたちの心の中に書かれていて、理性によって発見することが可能」(The great laws of morality are indeed written in our hearts, and may be discovered by reason [58]) であることを認める見解からは、頑迷な信仰者からは期待すべ

くもない、人文主義哲学の成果を読み取ることが、また、ロマン主義人間論の先駆けを見ることができます。

Chaponeにとって、社会の文明化の基礎はキリスト教、しかも、社会構造を形成する宗教各派ではなく、聖書の教えとしてのキリスト教であることは次の一節から明白です。

It is amazing that the Jews, possessing this prophecy among many others, should have been so blinded by prejudice, as to have expected from this great personage, only a temporal deliverance of their own nation from the subjection to which they were reduced under the Romans: it is equally amazing, that some Christians should even now confine the blessed effects of his appearance upon earth, to this or that particular sect or profession, when he is so clearly and emphatically described as the Saviour of the whole world? (62-63)

Chaponeは宗教の果たす役割を個人的完成（「私たちに可能な最高度の完成に到達する」(to reach the greatest degree of perfection we are capable of [77])）のみならず、よりよい人間関係、すなわち、よい社会の形成に影響を与えるものという観点からとらえていることが、「わたしたちはすべての同胞をひとりの愛する親の子供であるかのように愛し、尊敬するようになるでしょう」(we shall love and respect all our fellow-creatures, as the children of the same dear parent [92]) という言葉によって示唆されます。

Chaponeは新約聖書を読む目的を、書簡集のタイトルに用いられた言葉遣いに似た「心を改良し管理すること」(improvement and regulation of the heart [88]) と言い、彼女の概念が伝統的な *conduct book* (振舞の書) のそれと異なることに気づきます。「心の改良」が最終的には行動へと結びつくことはいまでもありませんが、Chaponeにとって肝要なものは内面の心であり、信仰の助けによって精神をより良いものに鍛えることです。なぜなら、「もし神の是認と恩寵がわたしたちの第一目標ではないならば、わたした

ちは間違いなく人間の賞賛に気を取られて、それが行動の主因となる」(if his approbation and favour is not our principal object, we shall certainly take up with the applause of men, and make that the ruling motive of our conduct. [91]) からです。すでに *humanity, compassion, sensibility* は人々の感性、価値観のなかに取り入れられた時代になっていて、特に洗練された女性は、内心が伴わなくても、外面的な振舞としてそれらを装うことを習慣的に身に付けるようになってきているからです。あるいは、社会の規範的価値観に適応しようとするあまり、それを自分の本心であるかのように錯覚する場合も珍しくありません。「同情心が人の心に刻み込まれたのは、ひとえに美しい顔を涙で飾るために、感じのよい倦怠感を目に漂わせるため」(*Compassion ...was...impressed upon the human heart, only to adorn the fair face with tears, and to give an agreeable languor to the eyes* [94]) であるかのような、過度の感情重視、感情移入が流行した時代において、気付かずして陥っている自己欺瞞といえます。これを避けて本物の「善意を涵養する」(*cultivate good-will* [92]) ためには、まず、宗教の力を借りて、「心の奥まった暗い隅をすべて探り、ありとあらゆる思いと意図を明るみに出」(*search into all the dark recesses of the heart, and bring out every thought and intention fairly to the light* [92]) さなければならぬ、と説きます。

Chapone は女性の人生における愛情の重要性を主張して、同性間、異性間どちらにおいても「人生においてほとんどすべての幸福と悲惨を左右するのは愛着」(*The attachments of the heart, on which almost all the happiness or misery of life depends* [99]) と言い切ります。Chapone にとって友人付き合いの目的は「互いに見習う二つの心に美德を養育すること」(*the cultivation of virtue in two hearts emulous of each other* [102]) であって、この過程を経て身に付けた「真の知恵と分別が自己の人生を安全にそして幸福に導き、また、他者にとっても有益な人となす」(*true wisdom and prudence...direct us safely and happily through life, and to make us useful and valuable to others* [106]) というように、各個人の人間的向上が

周囲によい影響を及ぼしつつ社会全体に広がっていく図式を心に描いていました。このような友情は心を開いて付き合わなければ育まれませんから、例えば Halifax のように交際には警戒心こそが第一という立場は取らず、信頼関係が人間の心に必要であることを認めます。

The human heart often stands in need of some kind and faithful partner of its cares, in whom it may repose all its weakness, and with whom it is sure of finding the tenderest sympathy. (117)

夫婦関係について、幸福のみならず人間的道徳的向上が配偶者如何であることを強く訴えます。したがって夫として選ぶべき男性を「この世を安全に立派にあなたの歩みを導き、来世において美德の報いをともにするような、尊敬すべき人」(a worthy man, who may direct your steps in safety and honour through this life, and partake with you the rewards of virtue in that which is to come. [121]) と描くのも当然の帰結といえるでしょう。この像は文脈から切り離して読むと誤解が生じそうですが、いわゆる父権制的なものではないことは注意すべきところです。Chapone のこの信念を幾分世俗化して *Pride and Prejudice* に当てはめれば、すなわち、来世ではなく、現世における夫婦の歩みとしてみれば、Lydia と Wickham, Elizabeth と Darcy のふたつのペアがいかに対照的に提示されているかが理解できます。

7. Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*

Wollstonecraft の *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) は 19 年前に出版された Chapone の *the Improvement* と比較対照することによって多少ともその特徴が明らかになるでしょう。*the Rights* は当時の知識人の一部からは毛嫌いされ、Hannah More は「書名そのものが空想的で愚劣です...女性ほどよい振舞いが従属にお陰を被っている動物は他にはないのですから」

(Barbara Taylor, 'Wollstonecraft, Mary (1759-1797),' *DNB*) と述べ、手に取って読もうとはしませんでした。が、*the Improvement* はこのような反感を買うことはありませんでした。後者は厳格とはいえなくても書簡体の枠組の中に収まっていて、一般読者はいわば立ち聞きをするという形式になっていますが、前者は社会批評書として読者に直に語りかける、より攻撃的になりうる形式といえます。実際、対象を限定する必要が生じないことから、社会の痼疾とみなすあらゆる話題について遠慮会釈なく論じ切っているようにみえます。Chapone が信仰と自己教育による個人の精神の改良の結果として生まれるはずの社会の改善を期待するのに対して、Wollstonecraft はむしろ、社会的・政治的条件が個人の改良を阻んでいて、現在あるような男女とも人間性を造り出しているという堅固な立場を取っていますので、社会制度・慣習を変革することなしに、構成要素である個人個人の思考・行動様式を変えることは不可能である、少なくとも、ふたつは車の両輪のように同時に進行することが欠くべからざることと考えていました。社会改革の必要性という視点からは Wollstonecraft の思想は Chapone のその延長線上にあるとみなすことは的外れではないと思われますが、企ての規模と激しさの点からみて、前者は明らかに後者よりラディカルといえます。その相違の淵源をそれぞれの伝記的背景に帰することはおそらく妥当なことであり、Chapone にとっては彼女の知的発展を奨励するような環境が、Wollstonecraft の厳しい男性観、痛烈な弾劾のスタンスは子供時代の家庭環境が、それぞれ影響しているようです。経済的苦境にあって、「深酒をしては妻や子供たちを虐待する」常習癖をもつ「子供じみたいじめ屋」である父親を、彼女は嫌悪していました。そして、「(Mary は) 独裁者の唯々諾々とした無抵抗の臣下となるような質にはできていなかった」と Godwin は記しています (ibid.)。

不都合な性癖などはまだ身につけていない少女に向けて書かれた穏やかな親子の教育書である *the Letters* と違い、社会の害悪や人間の不道徳性を批判する *the Rights* は、挑戦的な姿勢を表に打ち出しています。たとえば次の一節は Wollstonecraft の主張と文体の一致と呼ぶべきものの典型的な一例です。

Virtue, true refiner of joy! — if foolish men were to fright thee from earth in order to give loose to all their appetites without a check — some sensual wight of taste would scale the heavens to invite thee back, to give a zest to pleasure! (284)

美德、真に歓喜を高めるものよ—もし愚かな男性たちが、欲望のおもむくままに過ごさんと汝を脅して地上から追い出したとしても—趣味豊かな好色家が現れ、快樂の味わいを深めるために、天国にはしごをかけ、汝を呼び戻そうとするだろう！

ここでは、美德を性的快樂と同一平面上で結ぶどころか、前提条件として提示するという、エリザベス朝詩人の奇想を思わせるような修辭的離れ技を披露しています。伝統的な作法に従えば本来相反する概念の結合は、しかしながら、修辭を優先するために生じた意味の歪曲ではなく、経験と哲学的思索の結実であり、Wollstonecraftにとって思想的真實の表明であることに疑いはまったく残りません。とはいえ、同時に、この逆説的な表現が読者に強烈なインパクトを与えることも筆者は十分に意識していたに違いありません。女性作家にふさわしくないきわどい内容、挑発的な文体が不利な反応を招くことも、おそらく覚悟の上であったにちがいません。

一家庭であれ、社会全体であれ、男性と女性の間で、ものの考え方が異なり、互いへの信頼がほとんど築かれていず、人生の目標が大いに離れている場合、親密な関係が作られることはないと前置きして、男性に貞節がなければ、女性の貞節も「純粹さのおのずからなる反映ではなく、しばしば淫乱の性を巧みに隠すヴェイルに過ぎない」(285) 見せかけだけのものと墮する、とWollstonecraftは主張します。聖書の教えを基準として精神の改善を勧めるChaponeにとっては、各々が自分の道徳性を高めるよう責任を持つことが重要であったのですが、Wollstonecraftは男性の行動原理が女性のそれに悪影響を与えていて、女性の美德が名前だけのものとなっていることを指摘します。

Wollstonecraftの思想的関心と同時に、洞察力の鋭さをご理解いただくた

めに、*the Rights* に引用された Dr. Fordyce の *Sermons* からの一節をご覧下さい。

Never, perhaps, does a fine woman strike more deeply than when composed into pious recollection and possessed with a noblest considerations, she assumes, without knowing it, superior dignity and new graces; so that the beauties of holiness seem to radiate about her, and the by-standers are almost induced to fancy her already worshipping amongst her kindred angels. (2, 123)

麗しき乙女が、心静かに敬虔なる瞑想に耽り、いとも高貴なる思いを胸にしつつ、無意識のうちに気高き品位と新たな優美さを身につける時程、恐らく、人を深く感動させるものはないだろう。その時彼女の周囲は、聖なる美しさによって光輝いているかのようだ。そしてその姿は、それを見る人たちに、彼女が既に天使となって祈りを捧げ、その周囲に他の天使たちも集まっているのではないかと、空想させる程のものだ！

200 数十年を隔てた現代人はその途方もない文飾に辟易するかもしれませんが、当時の美文に慣れた人々であれば、せいぜいちょっとした読者サービスくらいにしか感じなかったであろうと思われる一文の中に、男性支配社会のもつ女性操縦法の典型的策略を Wollstonecraft が嗅ぎ取っています。彼女自身の批評を読んでみましょう。

I particularly object to the lover-like phrases of pumped-up passion which are everywhere interspersed. If women be ever allowed walk without leading-strings, why must they be cajoled into virtue by artful flattery and sexual compliments? Speak to them the language of truth and soberness, and away with the lullaby strains of condescending endearment! Let them be taught to respect themselves as rational creatures, and not led to have a passion for their own insipid persons. (150)

私は特にふくれ上がった情熱パッションがもたらす恋人氣取りの言葉—それはいたる所に見出される—to 反撥する。もし女性に自分の思うままに歩くことが許されてい

るとするならば、何故女性は、美德を身につけるために、わざとらしい甘言や女性向きのお世辞でおだてられなければならないのか？—真実の言葉をもっと彼女たちに語れ。ちやほやして愛撫を与える[子ども扱いして甘やかすような]子守歌の如き調子を止めよ！ 合理[理性]的な存在としての自分自身を大事にするように、彼女たちに教えよ。そして、代わり映えもしない自分の容姿などに夢中にならせるな。([] は筆者試訳)

Wollstonecraft は、未婚女性を美化するのは、男性による将来の征服の対象として育てられているという潜在意識を植え込むためだと結論づけて、このような文化的慣習を維持しようと努めている男性たち自身が夢にも認識していない意図を暴き立てます。そして、無意識の願望さえ暴露する強烈な眼力は、*the Rights* に横溢する彼女の女性解放のための基盤的思想である「女性を性的存在としてではなく、理性的存在として遇せよ」という命題に頑丈に支えられていることはいうまでもありません。

無知で非理性的であるように作られた既婚女性がこどもの養育を通じて、彼女たちを形成した社会と同じ社会を再生産していることを指摘する Wollstonecraft は、おとながこどもに人生についての知恵を授けることに関してもまた、深い洞察を示しています。彼女の考えに従えば、女性自身の自由意思による精神の発達を阻害しては、女性の美德は達成される可能性がないのと同じように、親がこどもに世間知を前もって教え込むことは、あまり役に立たないどころか、大いに有害であることを論じます。「子供は、世の悪徳や愚かさから絶えず守られていなければならない、という意見は、私には非常に誤っているように思われる」(That children ought to be constantly guarded against the vices and follies of the world, appears to me a very mistaken opinion; [165]) と述べて、人間的・道徳的成長は他者からの人工的な働きかけで一足飛びに実現されるものではなく、人生における感情を伴う直接的な経験という自然な過程を経てしか醸成されないものであるという自説を、自然界における植物の生長になぞらえて主張します。

the art of acquiring an early knowledge of the world...preys secretly, like the worm in the bud, on the expanding powers, and turns to poison the generous juices which should mount with vigour in the youthful frame, inspiring warm affections and great resolves. (165)

世俗についての知識を早くから得させるための技術は、花の蕾の中にいる虫のように、育ちいく力を目に見えない所で喰い殺し、暖かい愛情と強い勇気を与えつつ若い肉体の中で力強く上昇するあの豊かな体液を、毒液に変えてしまう。

「判断力を養わせる代わりに偏見をしみ込ませ、そして子供の心をかたくなにして」「利己的な性格」(165)に成長させる誘因を「毒液」と呼んでいるわけですが、上の一節に見出される、伸びゆく人間性の持つ善性に対する深い信頼とその妨害への怒り、そして、Blakeの『バラ』を思わせる卓抜な比喩との結合はロマン主義的詩的表現の精華といえるでしょう。Wollstonecraftの文章は時に意味の不明瞭、繰り返しの頻出といった欠点を探すことはできますが、Chaponeの平明で落ち着いたある散文には見当たらない、深い洞察、独創的な見解、思想的高め、そして、それらを表現する優れた修辞という魅力が備わっています。

* この論考は関西コールリッジ研究会第145回例会(2010年4月24日、於立命館大学)における口頭発表原稿を、わずかな加筆は別として、「です、ます」調も含め、ほぼ元の形のままだに提出したものである。また、「はじめに」は上記発表のシラバスに基づいている。

コンダクト・ブックスといえば今回取り上げた作品の他にも、著名なHannah Moreの*Strictures on the Present System of Female Education* (1799)や、その小説*Coelebs in Search of a Wife* (1809)をはじめとして、18世紀終わりから19世紀初めにかけては世紀の転換期にふさわしく、保守派、リベラル派を問わず、思想家、啓蒙主義者の著作は数多く出版されているが、短期間で調べ尽くせるものではなく、今後の課題としたい。

REFERENCE**Conduct Books:**

- Chesterfield, Lord. *Letters to His Son and Others*. Ed. R. K. Root. London and Melbourn: Dent (Everyman Classic), 1986.
- Gregory, Dr. John. *A Father's Legacy*; Mrs. Hester Chapone. *Letters on the Improvement of the Mind*; Lady Sarah Pennington. *A Mother's Advice to her Daughters*. (A compilation book.) London: Charles Daly, 1838.
- Fordyce, James. *Sermons to Young Women*. London: A. Miller, W. Law, and R. Cater; 1794.
- Savile, George. *The Complete Works of George Savile, the first Marquess of Halifax*. Ed. Walter Raleigh. London: Oxford University Press, 1912.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman with Strictures on Political and Moral Subjects*. Ed. Charles W. Hagelman, Jr. New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1967. (Originally published in 1792.)
- The Young Lady's Parental Monitor: Containing Dr. Gregory's Father's Legacy to his Daughters; Lady Pennington's Unfortunate Mother's Advice to Her Absent Daughters*. London: Nathaniel Patten, 1792. (Reprint published by Kessinger Publishing.) My citations for *Father's Legacy* are from this book.

Oxford Dictionary of National Biography:

The latest online version **D.N.B.** articles have been consulted for the biographies of the above-mentioned conduct book authors.

Novels:

Austen, Jane. *Emma*. Ed. Fiona Stafford. London: Penguin Classics,

1996. (Originally published in 1815.)
- . *Mansfield Park*. Ed. Kathryn Sutherland. London: Penguin Classics, 2003. (Originally published in 1814.)
 - . *Northanger Abbey*. Ed. Marilyn Butler. London: Penguin Classics, 2003. (Originally published in 1818.)
 - . *Persuasion*. Ed. D. W. Harding. London: Penguin Classics, 1985. (Originally published in 1818.)
 - . *Pride and Prejudice*. Ed. Vivien Jones. London: Penguin Classics, 1996. (Originally published in 1813.)
 - . *Sense and Sensibility*. Ed. Ros Ballaster. London: Penguin Classics, 2003. (Originally published in 1811.)
- Burney, Fanny. *Camilla or A Picture of Youth*. Eds. Edward A. Bloom and Lillian D. Bloom. New York: Oxford World's Classics, 1999. (Originally published in 1782.)
- . *Cecilia or Memoirs of an Heiress*. Eds. Peter Sabor and Margaret Anne Doody. New York: Oxford World's Classics, 1999. (Originally published in 1796.)
 - . *The Wanderer; or, Female Difficulties*. Eds. Margaret Anne Doody, Robert L. Mack, and Peter Sabor. New York: Oxford World's Classics, 1991. (Originally published in 1814.)
- Radcliffe, Ann. *The Italian*. Ed. Allen W. Grove. Chicago: Valancourt Books, 2006. (Originally published in 1797.)
- . *The Mysteries of Udolpho*. (No editorial information.) New York: Dover Publications, Inc., 2004. (Originally published in 1794.)

Some of the books referring to the Conduct Books:

- Bradbrook, Frank W. *Jane Austen and her Predecessors*. London: Cambridge University Press, 1967.
- Duckworth, Alistair M. *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1971. Reprint 1994.

- Kirkham, Margaret. *Jane Austen, Feminism and Fiction*. New York: Methuen, 1983. Reprint 1986.
- Molar, Kenneth L. *Jane Austen's Art of Allusion*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1977.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer*. Chicago and London: University of Chicago Press, 1984. Reprint 1985.

Japanese Translations:

- ウルストンクラフト, メアリ『女性の権利の擁護』白井堯子訳, 未来社, 1980年.
- オースティン, ジェーン『いつか晴れた日に一分別と多感』真野明裕訳, キネマ旬報社, 1996年.
- .『エマ』阿部知二訳, 中央文庫, 1974年.
- .『高慢と偏見』富田彬訳, ワイド版岩波文庫, 2002年.
- .『説きふせられて』富田彬訳, 岩波文庫, 1998年.
- .『ノーサンガー・アベイ』中尾真理訳, キネマ旬報社, 1997年.
- .『マンスフィールド・パーク』大島一彦訳, 中央文庫, 2005年.